

経済学分野の参照基準検討分科会（第4回）

2013年6月27日

参照基準の作成について

岩本 康志

本分科会で今回を入れて4回の審議をおこない、参照基準とは何か、参照基準に何を盛り込むか、について議論を重ねてきた。

これまでの議論を踏まえて現在、役員によって参照基準（素案）を作成中であり、次回（7月）の分科会で提示することを予定している。以下は、大きな選択について委員のご意見を仰ぎたい事項である（注 参照基準に盛り込みたいものについて積極的にご意見を頂きたいが、整合性をとるため取舍選択があり得る）。

また、参照基準の作成と同時に、分科会でどのような考え方で参照基準を作成していったかを説明する文書を委員長の責任で作成中である。これは参照基準に関するシンポジウムでの説明や他所で使用することを想定している。

【一般的なことについて】

- ・ 経済学のコアの部分を書くのか。広がりをもったものとして書くのか。
- ・ 数学の取り扱いについて。

【経済学の定義、経済学に固有の特性について】

- ・ 経済学の定義の書き方（ロビンズ、マーシャル、マンキュー）。
- ・ 学問の現状を書くのか、今後の学問の変化を見越しながら書くのか。
- ・ ゲーム理論の取り扱い。
- ・ 各応用分野をどのように触れるか。
- ・ 経済史をどのように触れるか。

【基本的な知識と理解、基本的な能力について】

- ・ 「基本的な知識と理解」として他に盛り込みたいものがあるか。
- ・ 「分野に固有の能力」として他に盛り込みたいものがあるか。

- ・「ジェネリックスキル」に何を盛り込むのか。
- ・「分野に固有の能力」と「ジェネリックスキル」をどのように書き分けるか。

【学修方法と学修成果の評価方法について】

- ・経済学における外国語教育についてどう考えるか。
- ・インターンシップについてどう考えるか。

「経済のグローバル化に対応するために、外国の経済事情およびその背後にある社会・文化等の十分な理解と国際的視野に立つ分析力・応用力が必要である。そのためには、広く外国語の学習が重要であるばかりではなく、外国語による経済書講読や講義、留学制度あるいは外国語によるプレゼンテーション・ディスカッション、国際的な対抗ゼミ・討論会などもそうした能力を養う役割を担うものである。それは同時に一般に外国語の学習を促すことにもなる。したがって、このような科目群で経済学の理解と応用力を高めることが望ましい。」

「経済学教育では、教室における講義のみならず、学生の応用力を養成することも求められ、その試みの1つとして、インターンシップも有効であろう。それは企業、行政機関などの仕組みを現場で捉え、経済学の重要性を認識するのに役に立つばかりでなく、就業体験を通して学生が問題の分析・解決能力を養うことにもなる。」

(大学基準協会「経済学教育に関する基準」より)

【教養教育と専門教育の関わりについて】

- ・学術会議による「学士課程の教養教育の在り方について」、「21世紀の教養と教養教育」に沿って、まとめていくか。他の視点からの整理を試みるか。

【その他に盛り込みたいことについて】

- ・その他に盛り込みたいことは何かあるか。

【シンポジウムについて】

- ・共催・後援団体について。
- ・パネリストについて。

今後のスケジュール（案）

第5回 7月

参照基準の検討（第2回）

第6回 9月

参照基準の検討（第3回）

第7回 10月

参照基準の検討（第4回）

シンポジウム（案）の決定

第8回 12月頃

シンポジウム

第9回 2014年1月

報告（案）の決定